

セツ ぶん

NO.91



ひと言

みんなでピースファーストの声を

佐藤 春治 (センター運営委員)

目次

ひと言	佐藤 春治 1
特集 今、子どもたちの幸せを願って	
笑顔あふれる子どもまつり	田代 葵 2
子ども・遊び・児童館	鈴木 宏之 4
自由への教育	虹乃美稀子 6
学び処しおがまの子どもたち	清水 仁 8
みんなと一緒にご飯を食べて遊ぶ	高橋 悦子 10
民間教育からみた子ども達の居場所について	大原 一郎 12
ラサール・ホームの学習支援	高橋 三代 13
教育時評	
大川小訴訟高裁判決 どう読むか	数見 隆生 15
3・11被災地からの便り	
今だから声にできること	阿部美弥子 16
おすすめBOOK	
震災と向き合う子どもたち	制野 俊弘 18
わたしの出会った先生22	
出会った先生方に感謝	高橋由紀子 19
子どもと学校 話し合いをしよう	佐々木大介 20
相談センター報告 第13回	
自己変革	寺沢 幹緒 22
おすすめ映画	
トンマッコールへようこそ	長住 康博 24
センターの動き	24

小学校6年の頃、「世界大戦争」という映画が公開された。主演は喜劇役者でもあった演技派のフランキー堺。戦争時代のことを思い起こしたくないはずの母に連れられて映画館で見たのだが、そのうち原爆・水爆を使用した戦争になるのではないかと心底恐怖を感じたことを覚えている。その時、私の頭を占めたのは、「世界大戦争」が起きた場合、どこが最も安全なのかという問いであった。私は真剣に悩み、その答えは海上という結論になった。

その影響もあってか、その後の私の就きたい職業は船乗りであった。商船大学で学び、世界を航海する大きな船の船長になることを夢見たが、経済的な困難や父親の反対でその希望は断念せざるを得なかった。その後、二転三転して数学教員に落ち着いた。教職に就き、平和がすべての大前提という信念で、平和教育への関心が高まって行った。それを誘導したのは、すべての人から未来を奪う「世界大戦争」への恐怖であったかも知れない。

トランプ大統領などの「○○ファースト」の主張に、他者との協力、共同よりも、自己利益最優先の姿勢を感じる。この姿勢は、自分にとって都合の悪い他者を排除する論理にも繋がり、他者との衝突を起こしやすい。その行く末に「世界大戦争」が映る。朝鮮半島の南北の指導者が会談し、東アジアの軍事緊張が緩和し始めた今こそ、私たちは「平和が一番」(ピースファースト)、「9条改憲ノー」の声をさらに大きく広げるチャンスではないか。

特集

今、子どもたちの幸せを願って

子どもたちの幸せを願わぬ人はいません。そして子どもたちの豊かな生活や確かな学びを保障しようとして活動しているのは学校だけではありません。県内各地で子どもたちの居場所づくりを通して活動を続けている方に、その活動の一端や願いを寄せていただきました。

んの遊びのひろばを用意しています。子どもが子どもらしくあそべるようにとの願いが込められた参加費無料の年1回の手作りのお祭りです。

毎年3000から4000人の親子が参加する仙台子どもまつりでは、子どもたちが大自然に囲まれた中で一生懸命に頭と体を動かしながら、元気いっぱいに遊んでいます。

まず初めに、遊びの広場で遊ぶ子どもたちの様子の一例をご紹介します。名物コーナーであるダンボールのひろばでは、大きな段ボールを使って立派な家やおもちゃを作ることができます。この広場では親子で一緒に工作を楽しむことができます。子どもたちは自分から何をやるか意見を出したり、作品を組み立てるお手伝いをしたりしています。親子で苦労して作った立派なダンボールの家を見て、子どもたちは達成感も一段と大きい様子でした。そんな子どもたちに作った家のインタビューをすると、自分がこだわった部分を丁寧に説明したり、嬉しそうに自慢したりする様子がとても印象的でした。

腹話術や人形劇の広場では、子どもたちが集中してお話や物語を聞いています。子どもたちは、人形がしゃべっていることに驚いている様子で、中には人形と話してみようとする子どもも見られました。

笑顔あふれる

子どもまつり

田代 葵

雲一つないすつきりとした青空、新緑の草木に覆われた広々とした大地、爽やかな風。眩しく明るい太陽に照らされた大自然の中で、子どもたちの元気で明るい声が響きわたります。子どもたちの目の前には創造性にあふれるのびのびとした世界が広がっています。そこには、たくさんの方々の笑顔があふれるお祭りがあります。

仙台子どもまつりは、毎年5月の第4日曜日に三神峯公園で開催されているお祭りです。1971年、児童憲章制定20周年を記念して第1回が開催され、今年で48回目を迎えました。会場には、幼児から小学校高学年までを対象に、「ダンボールのひろば」「新聞の海」「スライム」「手作り縄」などたくさ

スライムや小麦粉粘土の広場では、赤や青など自分の好きな色を選んでお気に入りのスライムや粘土を作っています。中には「全部の色を混ぜたらどうなるんだろう」という好奇心から全ての色を混ぜて、どろどろした色の作品を作る子どもいます。しかしそんなどろどろした色を見てもなぜか子どもたちは大喜びしています。「すべての色を混ぜるとこんな色になるのか」という新しい発見があり、満足した様子でした。

子どもまつりに参加する子どもたちの姿からは、どの遊びの広場を見ても、生き生きと笑顔をあふれている様子が見られます。子どもたちは、広々とした自然の中で思いっきり体を動かすことができるだけでなく、見たり、聞いたり、作ったりと五感を働かせながら遊んだりすることが出来ます。コマ回しのような昔遊びのコーナーでは、日本の文化に触れることも出来ます。子どもたちは、自分が思うように工夫をしたり、モノを使ってこだわって遊んだりするように想像力や発想力を存分に発揮しながら遊んでいます。子どもたちが想像力や発想力や好奇心のすべてを生かしながら、普段はできない体験・経験をすることで、新しいことへの気づきや発見があります。その気づきや発見が、子どもたちの豊かな成長につながります。このように、どの遊びの広場でも、見る、聞く、作る、動く”など、創造性豊かにいろいろな体験の場を用意できるように工夫されています。一人で遊んでも、友達と遊んでも、子どもが主役になって自由に遊ぶことが出来るのが仙台子どもまつりの特徴です。

ので近所の公園でよくサッカーをして遊びましたが、町中にある公園という小さなスペースで遊ぶことに少し物足りなさを感じていました。そこで、広い町内を使った鬼ごっこなども考えてみました。が、車通りが多く、私有地には入れないため結局やめたほうがいいという結論になりました。私はこのような遊びを制限される環境の中で、物足りなさを感じていました。「もっと外で遊びたい」「体を思いっきり動かしたい。」現代の子どもたちのこころの中にも、このような心の叫びがあるのではないのでしょうか。



子どもが子どもらしく遊ぶ”とはどういうことなのでしょう。仙台子どもまつりの中で子どもたちが、活発に外ではしゃいだり、熱心に工作をしたり、真剣に紙芝居をみる様子が印象的でした。全体を通して、どの遊びの広場からも子どもたちの笑顔がみられます。それは、子どもたちが心の底から遊びを楽しんでいる証です。すっきりとした青空、広々とした大地、爽やかな風。そんな大自然の中で子どもたちが思いっきり体を動かして遊ぶこと。これは何物にも代えがたい、子どもたちの発達の保障であるのではないのでしょうか。

最後になりますが、仙台子どもまつりの運営は、学生・社会人・主婦などが集まって実行委員会を組織し、毎年20を超

える団体・個人が実行委員会に参加し、遊びの広場の企画・運営を行っています。また、当日は延べ2000〜3000人もボランティアの方々にご協力を頂いています。仙台子どもまつりでは、運営に携わる全員が、「子どもたちに楽しんでもらいたい」という温かい気持ちをもって運営を行っています。仙台子どもまつりは、子どもたちが笑顔になれるようにと心が込められた、温かみのあるお祭りだと思います。このような子どもたちを笑顔にできる仙台子どもまつりの活動を今後も続けていくとともに、さらにたくさんの方に仙台子どもまつりを知ってもらいたいです。

(第48回仙台子どもまつり実行委員長・東北福祉大学学生)

子ども・遊び・児童館

鈴木宏之

時代の縮図として様々な問題を抱えながらも、児童館は「放課後の子どもの居場所」の役割を担っています。そこでの子どもの姿を、主に遊びに関わって何点かスケッチしてみたいと思います。

「やりたい」の一言から

去年10月終わりの月曜日、保護者のお迎えの時黒いマントを着て遊んでいた子が何人かいました。何の遊びだったかというところ……。

その前の週、子ども達から「仮装したいなあ」という声が聞こえてきました。

(そうか、仮装遊びもいいなあ。丁度次の月曜は学校の振替休業日で1日時間があるし)

そう思っただけで急遽、子ども達に「仮装遊びをしてみない?」と呼びかけました。

いざ当日、10人程が集まり児童館の一室でワイワイガヤガヤ。黒いビニール袋を切って作ったマントに持ち寄った飾りを付け、新聞紙で杖を作り、魔法使いにでもなった気分でしょうか。作り終って一通り遊んだ後もそのまま着ていて、お迎えの方々がそれを見ることになった訳です。

「やりたい」の一言から、遊びが作れるのも児童館の子どもならではのことでしよう。

「無形の価値」

2年前の10月の土曜日、もう大体の子は帰った夕暮れ時のことでした。その日自由来館で来ていた4年生の子二人が、児童クラブの女の子と一緒に児童館に戻って来たのです。女の子は少し涙顔でした。

「どうしたの?」驚いて聞くと、4年生の子が教えてくれました。

「家が閉まっていて、この子は児童館に戻ろうとしていました。この子一人だけだったので、私たちは一緒についてきました」

4年生の子たちはその日この女の子と児童館でかくれんぼをして遊び、顔見知りになっていたそうです。それにしてもそのことだけでわざわざ児童館まで送ってきてくれるとは……。

「ありがとう。君たちのお陰でこの子はとても心強かったと思っよ」

そうお礼を言いながら、私は胸が一杯になってきました。そして後からこのことを思い出すうちに、どこかで読んだ「無形の価値」という言葉が浮かんできました。

後で聞くと女の子の家では事情があつて帰るのが遅れたということでした。

何かあつたとき手を差し伸べるきっかけが、今回は児童館での遊びの中から生まれたとしたなら、何物にも代えがたい価値あるもののように思えます。

その名は、ダンダン

夏休みの一日、子ども達が見慣れない遊びをしていました。おもちゃ入れに使っていた衣装ケースを逆さまにして被っています。そして何やら目鼻を描いて顔らしき紙をその衣装ケースに貼っています。

「それなあに？」聞くと返ってきたのは一言、「ダンダン！」（ああ、そうか）この何日前、仙台市立工業高校・模型部がそれは見事な手作りのコマどりアニメを児童館の子どもに見せてくれる毎年恒例の行事がありました。

その上映会で案内役をしてくれたのが、模型部のマスコットキャラクター・ロボットの「ダンダン」だったので。夏の日中、着ぐるみにダンボール製のロボットの頭を被った高校生が（多分）蒸し風呂のような暑さに耐えて子どもたちのために演じてくれた「ダンダン」が、ちゃんと子どもに受け止められ、自分たちの遊びとして消化され、オリジナルのダンダンごっこになっていたのです。高校生と小学生のたくまざる遊びの交流をそこに見た思いがしました。

ボランテアさん

「お帰り。手洗い、うがいはした？ インフルエンザ流行ってるよ」

3月、児童館の玄関で子ども達に声をかけているのはボランテアのKさんでした。

児童館には仕事帰りや休みの日、遊びの相手や生活面での声掛けをしてくれる成人ボランテアが何人かいます。Kさんもその一人です。

Kさんは小学生の頃、宮城野児童館ができて数年後、自由来館で遊びに来てくれるようになりました。高学年になっても利用は続き、だんだん小さい子のお世話をする場面が生まれてきました。そのことが楽しかったのか、中学生、高校生になっても来てくれました。そして就職先は介護施設。

人の役に立つことが好きだったのかもしれませんが。大事な休みの日や疲れているであろう仕事の後、今度はボランテアとして来てくれるようになりました。

時には子ども達とうまく気持ちが通じなくて困ってしまうこともあるようですが、それも一つ一つ乗り越えて週に何回かやって来てくれます。

児童館は、長い目で成長に関われるところでもあります。そしてKさんの場合は遊びが仕事にも関わっていったように見受けられます。

S君のピアノ

今日も児童館の一室からS君のピアノの音が聞こえてきます。右手のメロディーだけでなく、左手の伴奏も上手です。

「なんとなくまねして覚えたんだ」と言っていました。

S君の家にはピアノは置いていなくて、児童館で弾けるようになったそうです。

S君は1年生の頃から何かを太鼓に見立て叩いて音を出し



たりする、楽器遊びが好きでした。そして「発表会をするから聴きにきて」と、何度か誘われたのを思い出します。夏の介護施設訪問で発表するドラえもん曲が児童館で流行って何人かが弾いていたことも、まねをするきっかけになったようです。

友達と気兼ねなく好きなように弾ける環境の中で、S君はピアノへの興味を育てていったでしょう。

児童館に集まる子ども達の思いは様々、やりたい遊びも様々。そんな子ども達が児童館という場を使って、思い思いの遊びを見出し今日も楽しんでいきます。

(宮城野児童館館長)

自由への教育

〜幼児教育が目指すもの

虹 乃 美 稀 子

当園は、2008年にシユタイナー教育を実践する自主幼稚園として開園しました。東仙台の一軒家が園舎となつています。

私自身は元々、仙台市の保育士として保育所や児童相談所の一時保護所に勤めていました。充実した保育士生活ではありませんが、当時から（今から四半世紀ほど前）児童虐待や発達の問題を抱える子どもたちの増加、家庭の養育機能の低下など、社会の変化とともに激変して行く子どもたちを取り

巻く状況に考えさせられることが多く、学生時代から関心のあったシユタイナー教育を志す気持ちが高まってきました。思い切つて退職し、シユタイナー幼児教育者としての学びを始めたのが2001年のことです。

自分で園を立ち上げるなど思いもよらないことでしたが、学びを終えて仙台に戻ってきた頃に子どもを持った友人知人たちが集まってきて、小さな親子クラスを始めたのがきっかけとなりました。そのお母さん方の声に応えるようにして生まれたのが現在の「虹のこども園」です。今年で開園して11年目となります。家庭的で丁寧な保育を行い、親子クラスから小学生クラスまで12年にわたる子どもの成長を長い目で見る草の根の教育機関として、多くの子どもたちが巣立っていきました。

子育ての価値がないがしろにされることが多い現代社会において、「子どもを育てる」という人類にとって大切な仕事が大きな喜びと確かな礎のもとに営めるよう、ご家庭やお心寄せくださる多くの皆さんのご協力と共に歩んできました。

大人も戸惑うほどの情報化社会の中で、子どもたちは大人の暮らしに「付き合われる」ことが増えました。子どもの健やかな育ちを支える生活リズムも食事も、大人の生活に合わせて乱れがちとなる一方で、インターネットやスマホから流れてくる選別されない垂れ流しの情報に子どもたちは晒されています。忙しい大人の暮らしを追いかけるように、幼児期から様々な習い事で忙しくさせられ、ほんやりと時計を忘れて庭の蟻と戯れたり、雲や草花と会話する



ような子どもらしい時間はほとんど失われています。

シュタイナー教育とはどんな教育ですか、と訊ねられることがありますが、私は決してメソッドや方法論ではなく、人間を育てる上で大変普遍的なことを大切にしていると思っています。つまり、人間の自然な成長の歩みを考慮して「子どもたちが、子ども時代を子どもらしく過ごす」ことにより、成人した時に自己肯定感を持つて、本質的に自由に生きて行くことができることを大切に考えているということです。

「自由な大人」とはどんな在りようでしょうか。それは、自分のやりたいことが自分で解り、それを責任を持つて成し遂げられるということだと思います。人の意見に飲み込まれず、自分の心の声に耳を澄ませられること。大切な選択を周りの状況に流されずに、自分で選ぶことができること。周囲と良い関係を持ちながら、自分の選択した生き方を責任を持つて貫けること。様々な困難もある人生を自分らしく生き抜いていくための基本姿勢です。シュタイナー教育が「自由への教育」と呼ばれる所以です。

保育所に入れない待機児童の問題がよく話題になり、また多くの幼稚園が認定こども園として幼保一体型の保育施設に移行していく中で、午後2時には降園となる昔ながらの「幼稚園」は、時代に逆行しているように見えるかもしれません。しかし、私たちは現代における新たな役割を担っているとも自負しています。それは「親も子も一緒に育ちあう場としての幼稚園」であるということです。当園に通うご家庭は、決して専業主婦であることが許された経済的な余裕のあるお家だけではありません。母子家庭の子も、自家送迎をやりくりして乗り越え、母親も仕事をしながら通っている家庭の子もいます。それでも、大事なことは何よりも子どもを育てていくことであり、子どもたちには本当の意味で「子ども時代」を保障していくことが大人の責務であると共感し合う大人た

ちが集まって、みんなで育ち合っている小さな村のようなのです。

以下は、保育で大切にしている私の気持ちを詩に託したものです。

こどもたちにとって

こどもたちにとって大切なことは

本当はカタチのないものだ

安易な褒め言葉よりも、

静けさにある慈しみのまなざし

タレントのような満面の笑顔よりも、

その人らしく誠実にこどもの前に在ること

風邪薬や注射より、

弱ったときに背中にとっと当ててもらえる温かな手

テレビやネットから流れてくる

情報のふりをした電気信号より、

今ここにしかない鳥や風の知らせ

有名建築家の建てた流行りのお家や保育園より、

小さくても古くても、人のぬくもりが行き届き、

呼吸が楽にできる居場所

スピーカーから流れる感じのいい音楽よりも、

大好きな大人が口ずさむ鼻歌

世界中の動植物を網羅した百科事典よりも、

そんな命を生み出した大元への畏敬の祈り

こどもたちを育てるのに

本当は立派な施設も、高価なおもちゃも、

趣向を凝らした教材も

何もいらぬ

必要なのは、大人の誠実なぬくもりと、

本質的な自由を尊ぶ精神と、

そしてユーモアだ

子どもたちにとって大切なことは、
わたしたちみんなに大切なことだ

「暮らし」を取り戻そう

子どもたちを「暮らし」の中で育てていこう

シユタイナーは「すべての教育は自己教育です。実のところ、教師や教育者としての私たちは子どもにとっての環境でしかなく、子どもは自分で自分自身を教育していくのです。しかし、子どもは内なる運命にもとづいて、自分自身を教育しなければなりません。それが可能となるためには、私たちが適切な環境となる必要があるのです」と話しています。教師や保護者である私たち大人の試行錯誤の努力の在りようこそが、子どもが育つより良い環境に少しでもなり得れば幸いであると祈りのような気持ちで、日々の保育を楽しんでいます。

(東仙台シユタイナー虹のこども園園長)

学び処しおがまの

子どもたち

清水 仁

昨年4月、「勉強したい」「学び直したい」人達を対象に、多賀城市下馬に「学び処しおがま(以下:マナシオ)」を開きました。

一昨年の9月、とある居酒屋。4人(当初、清水不参加)

が集まり、「学習・介護・子育てで困っている住民へのサポート」「様々な悩みに一緒に考えてくれる居場所作りを」と、それぞれの思いを出し合つて、酒も話も進んだようです。

軌を一にして、私(清水)も、学習支援を基本にした居場所作りのために、空き部屋はないか、協力者はいないか、子ども食堂の中でできないか、模索していました。

12月、偶然にも、前述の4人から相談を持ち掛けられ、すぐにでもできる学習支援を4月から始めることに即決しました。

マナシオの一日は、「二分間スピーチ」で始まります。一週間の自分の出来事を話す、いわば朝の会です。自分のことをみんなで共有しようと思えました。「家族で泊まりに行った」「賞をもらった」とか、中には「今年の先生、怒ってばかりいる」「マナシオ辞めたい」との深刻な悩みも出てきます。でも、誰かが「何も話すことない」というと、「私も」「オレも」と続いてしまいます。が、大人や周りから質問をちよつとすると、いっぱい話します。話すきっかけを待っているようでもありません。

そのあとは、「五七五の世界」です。昨年は、子ども新聞の記事の読み合わせでしたが、読むだけに終わって、記事の内容が深まらないので、どうしたらいいか悩んでいたところ、教育文化研究センターの小野寺実践に刺激され、新年度から取り組み始めました。

そのあとに、いよいよ学習に入ります。子どもたちは、答えが一つしかない算数の解き方の工夫や答えの間違ひの話は素直に受け入れてくれますが、漢字の形や書き順を注意すると「これでいいの!」と、反対に怒られてしまいます。漢字をノートの中の行から書き始めるのも、学校では見られない姿です。「なるほどねえ」とさらつと言つてあげるだけです。

自分の宿題や課題を、この時間にやると決めて持つてくる

子もいれば、習い事の英語や数学のプリントを持ってくる子もいます。

中には、課題はちょっとだけやって、あとは、カードゲームの話に夢中になる子もいます。でも、「これ、教えて」と言ってくることもあるので、自分でやっていくものを決めているのでしょうか。

唯一、中学生が一人います。部活やら学校の行事等で毎週は来られないのですが、「細かいルールがわかった」「次は、密度を学習したい」との感想を話していきます。

学習が終わった後は、自由時間です。むしろ、自由時間のほうが長いかもしれません。

以前は、近くの病院の図書室から本を借りてきましたが、最近では、自分でおもちゃを持ってきて、友達と遊んでいます。時には、部屋の中で追いかけてくっことをして「部屋の中では静かに！」と注意されていますが、かまわずに走っています。学校の教室みたいです。

この他、夏休みには、特別教室として、読み聞かせや腹話術の鑑賞、浦戸諸島散策もしました。冬には、ケーキ作り、春には、卒業を祝う会もしました。

開処時の生徒は知人のお子さんだけでしたが、間もなく、「チラシを見たので」「紹介されたので」ということで、生徒が徐々に増えました。増えることはいいいのですが、(開処時間である)土曜日午前は、親が仕事なので、子どもだけで家に置いておくのは心配だから、或いは、祖父母と過ごすより勉強しに行きた方がいいとの理由で申し込んで来るのです。

当初予想していた生徒とは、「勉強がわからないけれど、高額な塾には行けない」子でした。それが、子どもの預かり場のような受け入れていいのだろうか、スタッフで話し合いました。

学校もある、家庭もある、塾もある中で、こうやって、マ

ナシオのような居場所を求めてくること自体、今の子どもは現実ではないのだろうか。たとえ、きつかけが、本人の心からの願いでなくても、子ども自身が来ることに納得して来ればいいのではないのか、喜んで帰ってあげばいいのではないか。そもそも、勉強ができるできない、貧困か否かの境目は難しいし、区別することはないだろう。小中学生は、無条件に受け入れてはどうかと結論に達したのです。

先日、前述のカード少年が、部屋に入るなり、カードを広げ、学習支援ボランティアの大人と一緒にやろうと誘いました。カードに疎い大人にとって、いちいち説明されても理解するのが大変なので、近くにいた2年生の男子に交代を頼みました。カードゲームは初めてというのですが、喜んで相手になつてくれました。カード少年は、いつもなら、さつさと帰るのに、この日は、「もう一回、もう一回」と言つて時間をオーバーして、超満足して帰りました。

マナシオは、確かに、学習に悩みを抱えている人を対象にしていますが、学習の悩みを、学力面だけと受け止めていたのでは根本的に解決できないのではないかと考えています。学校の勉強を教えることはもちろんのこと、孤食ならぬ孤学ともいえるような一人ぼっちで学ぶより友達と学ぶ楽しさを知ってほしい、そして、一方的に教えるのではなく、生徒同士が教え合い学び合うことと学び直しの要素も入れています。そもそも、勉強がわからない、楽しく学びたいと思わせる元々の責任は、どこにあるのだと言いたくなります。

生徒たちがマナシオに来て、楽しく学習ができた、生きて



てよかったといえる時間を過ごすことができればいいと思
ています。

「またね。」「さようなら。」で帰る笑顔が、マナシオの活動
の源です。

(学び処しおが代表)

みんなと一緒に

ご飯を食べて遊ぶ

—子どもたちを育てる『子ども食堂』

高橋悦子

宮城野区銀杏町にある「乳銀杏保育園」で働いていた元職
員が中心となり2016年7月から「宮城野子ども食堂」を
始めました。子どもの貧困が大きく報道されるようになった
こと、子どもだけで食事をする家庭が増えてきていることに
心を痛めたからでした。

第1回目は夏休み中だったのでランチにしようと決め、宣
伝のチラシは近隣の宮城野児童館と原町児童館におかせても
らうことにしました。前日には予想より申し込みがあること
がわかり、不足分の食材を増やしご飯を追加で炊きながらの
対応になりました。

当日、市民センターに集まって来る子どもたちの様子は、
特別なお食事会と呼ばれてきましたというようになってもうれ
しそうな雰囲気でした。家庭の状況がどうであろうと、みん
なで一緒に食べるということが、どの子にとってもこんなに

楽しいことなんだ、こんな場所が必要なんだと痛感したので
した。この日は子ども57名、大人36名が参加、スタッフ入れ
ると100名以上になりました。

それから毎月2回、第2、第4木曜日の夕ご飯を提供して
きました。友達と一緒に、あるいは児童館からまつすぐに、「
ちゃんもうきてる?」「今日はくちゃんと一緒に食べるんだ」
「今日のご飯なんだっけ」などとおしゃべりしながら来る子ど
もたち。受付で出席確認をしてバッチをつけ手洗いを済ませ
てから遊ぶ部屋に向かうのですが、早く遊びたくて駆け出す
子もいます。迎える私たちも、毎回出会いを楽しみにワクワ
クしているのです。

3月に転勤になるお母さんが「子ども食堂は本当に楽しかっ
たと言っていました」と挨拶にきました。孫の保育園児と一
緒に来るおばあちゃんは「具合悪いから休ませようと思っ
ても、いぐつて聞かなくて」「一人っ子で来年入学だから小学生
の様子が変わるのもいいし、お母さんたちとおしゃべりでき
るのも楽しい」と話しています。いつも一緒になる小さい子
の面倒を優しく見てあげる様子をみると、お兄ちゃんらしく
いい体験になっているんだなと思います。お母さんのいない
Aちゃんにとっては、ボランティアの女子学生が来るのがと
てもうれしいようです。その時はAちゃんがお姉さんに甘え
られるようにできるだけ傍でかかわってもらおうようにします。

児童館の職員は「今日、子ども食堂ある?」と聞いてきた
1年生のUちゃんに「今日じゃないよ。来週だよ」と伝える
と「えー、つまらない。どうしてないの?」と言っていたよ。
Tちゃんに「きのう、子ども食堂どうだった?」と聞いたら、
「クッソ(超という意味らしい)楽しかった」だって。などと
報告してくれます。

子どもたちは5時頃からきて7時のお迎えまでを過ごすの
で、きてすぐ宿題を広げる子もいれば、仲良しの友達が来る

のを待つて遊びだす子もいます。市民センターには2つの和室が有り、その日予約できたほうの和室を使いますが、小学生は「今日どっち？」と聞き部屋によって遊びを想定しているようです。小部屋では「探偵ごっこ」などごっこ遊びが始まり、自分たちの世界を楽しんでいます。トランプや将棋、オセロなど学校が違って一緒に遊ぶ姿もあります。ゲームを持つてくる子たちもいますが、「前にやった、はないちもんめやりたい」とわらべ歌も好きです。その時は周りの子どもたちを誘つて一緒にやったり、座布団で「座布団取りゲーム」などもして遊びます。ゲームだけでなくみんなで遊んで楽しかったと思える時間になりたいと考えています。5時半から食事をして、お迎えが来るまで又遊べるのがうれしいようです。まぜてもらえないなどの言い合いもありますが、双方の話を聞きながら見守るようにしています。

3月に市民センター近くの「宮城野納豆」敷地内に、築90年の物置を改装した古民家風「となりのえんがわ」ができました。障がいを持った方でも気軽に集えるようにと車椅子対応のトイレや、子育て中のお母さんのために授乳室やオムツ替えのベットなども用意された、納豆屋の奥さんの思いがこもった建物です。4月から月1回は会場をそこに移して行っています。そこは中庭がとても広く、子どもたちは暗くなるまで鬼ごっこや、バトミントン、ボールなどで遊びます。どこでも遊びはつくられるし、子どもにとつてはやはり遊びが一番だなと思うところではあります。

食事の提供の他に、年に数回は、味噌やうどんづくり、おやつづくりなど食育活動も行います。やはり子どもたちは、食べるだけでなく自分たちで作る活動は真剣で意欲的です。普段やっている子が腕前を發揮したり、活動に参加して「シェフになりたい」という子もいます。この活動日は、家族で夕食をとれる子どもたちも参加できる機会にし広く声かけをし

ています。

できるだけ子どもたちの思いを受け止めながら関わつていき、心地よい仲間関係にしようと努力していますが、子どもたちに関わるスタッフが少ないのが悩みです。もつとおしゃべりしたり、宿題をみてあげたり、遊び相手になつたりしたいなと思います。

一緒に参加している小学生のお母さんは、子ども食堂は人間関係がつくられる大事な場所だと思つて語つています。そしてここは、子どもの気持ちや行動を受け止めて接しており、あまり約束事で縛るのではなく自由に過ごせているところがいいなと感じているようです。初めてのお母さんにも安心してもらえるよう心配りしてくれたり、子どもたちの様子も見守つてくれるお母さんに助けられています。

貧困の格差がますます大きくなる現在、子ども食堂に来ている子どもたちも低所得家庭の子どもが多くいろいろと生きづらさを抱えています。生活の苦しさを訴えられることも多くなりました。みんなと一緒においしいご飯が食べられ友達とも遊べる、自分たちを待つていてくれる場所があることが、子どもたちの日々の生活に楽しみと潤いをもたらしてくれることを願いつつ活動を続けています。



(宮城野子ども食堂代表)

民間教育からみた

子ども達の

居場所について

大原一郎

私は、民間教育というフィールドで活動してきました。大まかには、小学生から浪人生を含む大学受験生への学習指導とともに、高校や大学において進路指導のお手伝いなどをさせていただいておりました。また、周囲からの要請に応じて、一時、学習塾を運営・経営したり、地域の無料塾をお手伝いさせていただいたりしたこともありました。これらの経験を踏まえ、その中で感じた雑感などを綴らせていただきます。

今日、学習塾などの役割は、学校での学習内容を補強し、受験などに向けた様々なノウハウを提供することにあります。一方で、子ども達は、それにとどまらず、塾などにおいて、学校とは別の枠組みでの人間関係を構築し、進路などについての相談の場を得ていることを感じました。あくまでも商業ベースという限界はありましたが、私自身は、自分が担当する子ども達に、そのような場を提供することを心掛けました。

また、学習については、あくまで、学校での学習を軸にすべきであることを説きながら、弱点の発見法、効率の良い学習法、受験対策の進め方などを教えてきました。学校の先生方と接することが年に何回かありましたが、日頃の先生方のご苦労、ご尽力に、感服することも度々ありました。合わせて、

学校の先生方の仕事上の負担を減らしながら、子ども達と向き合う時間を確保する必要性を感じました。

以上を踏まえて、私自身が何よりも感じたことは、教育の機会均等という憲法の理念が、空文化する危機にさらされているということでした。大変僭越な言い方かもしれませんが、もっと現場で働く先生方の人数を増やし、自主性を最大限に尊重した研修を充実させ、子ども達と向き合う教育ができれば、このような状況は、改善することができるはずです。そのためには、国民的なレベルでの議論により合意を形成し、政治なども動かさなければなりません。民間教育に携わってきた私としても、そのことを強く感じました。

そこで生活の糧を得てきた私が言うのもおかしいのですが、学習塾や予備校が社会において比重を高めていくことは、あまり望ましいことではありません。しかし、一方において、現状を後戻りさせることも現実的ではありません。私としては、協力と共存が鍵になると考えています。なお、民間の教育機関による過度の商業主義や競争を戒めることは当然です。現時点においては、お互いのノウハウを吸収しあうような機会が得られるとよいと考えています。私は、先生方向けの講演などを担当することもありますが、逆に、学校現場のことをもっと知りたいと思っていました。

さて、これまで述べてきたことと重複しますが、子ども達の居場所について考えたいと思います。最近の子ども達、といっても、高校生、専門学校生、短大生、大学生なども含む広い意味について述べさせていただきます。

子ども達に居場所が必要な理由は、社会の一員として役割を自覚すること、様々な価値観や生き方を持った人と接し、お互いを高めあうこと、悩みや相談を打ち明け、解決の糸口をつかむことなどがあると考えます。一方で、現在の子ども達は、自分の将来についてじっくり考える時間を奪われ、追

い立てられるような傾向にあります。それは、受験や、就職活動に至るまで、共通しています。将来について、多様な選択肢があるはずなのに、それについて、じっくり考える時間や機会を確保するのが難しいのは、憂慮すべきことです。原因は、過度にシステム化されていることなどにあります。

では、打開の糸口はどこにあるのでしょうか。一番は、政治の役割が大切です。公教育の充実、特に、繰り返しになります。子ども達を支援することにもっとエネルギーを注ぐことが重要です。

次に、対話の機会を増やすことが大切です。保護者、公教育、民間教育など教育に携わる者が、できれば、子ども達も加えて、さらに、立場を超えて、対話に取り組むことにより、教育の課題を共有することが出発点になります。そこで、どんな居場所が求められているかを考え、実現できることは、小さなことからでも具体化することが、大切なことであるといえます。

(塾講師)

ラサール・ホームの

学習支援

高橋 三代

私は、5年前に東仙台小学校に転勤し、そこで定年退職を迎えました。赴任してきたときクラスにはラサールホーム(児童養護施設)の子どもたちが在籍し、12月にラサールホームのクリスマス会に招かれました。そこで子ども達の聖劇を見

て、そして透き通るような声の賛美歌を聴いたとき、クリスマスチャンの私は、神様に招かれて東仙台小学校へ来たんだなと思いました。聖書にある、イエスは「わたしの名のためにこのような子ども1人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」(マルコ9:37)が私の頭の中をぐるぐる回りました。そして、再任用が終わったら、ラサールホームで学習支援のボランティアをしようと決めていました。私が神様から頂いた賜を子どもたちに与えられるのは、学習支援しかないと思ったからです。

今年、3月で再任用が終わり、いよいよラサールホームに学習支援に入りました。5月から、前任校で教科指導エキスパートとしての仕事が入り、週に1回しか行けないときもありますが、子どもたちは待っていてくれます。先生でもなく、おうちの人でもないけれど、ちよつと知っている家庭教師のおばさんのような感じかな。

4月、午後2時頃、1年生が帰ってきました。

「お帰り。今日も学校で頑張ってきたね」

「こんにちは。よろしくお願ひします」

まだ字も書けない、読めないはずの1年生ですが、熱心なホームの職員さんのおかげで、大体読めて書ける子もいます。鉛筆を持って線を引くのも大変時間のかかる子もいます。宿題も出していないので、名前の書き方や、数字を書いたり、運筆練習の点繋ぎをしました。特に授業参観も近いので、名前を丁寧に練習しました。6月になって、ひらがながとても上手に書けるようになり、読める文字も増えてきました。学校教育の力の大きさを改めて実感します。

「今日は『れ』だよ。先生に上手とほめられたんだよ」と、新しい知識を身につけた喜びをうれしそうに話してくれます。

午後3時頃、2年生、3年生が帰ってきます。私が学校に

勤務していた頃は必要と思つて出していた宿題でしたが、多
いなあと感じました。算数プリントはきつと授業で学習して
きたので、できるものなのでしょうが、理解してない、ある
いは四則計算に時間のかかる子どもは、一人で正しくできま
せん。間違つた答えを書いて戻され、またやり直しをするより、
正しい答えを書いて、1回で合格した方が子どもも先生も気
持ちがいいはずです。だから、全部正しい答えを書けるまで、
できるだけ見てあげることになっています。幸い、子どもたち
は根気強く正しい答えになるまで取り組みます。これはとて
も立派なことだと感心しています。気持ちが乗らないときも
ありますが……。

音読は、一人読みだけではなく私と子どもで交互に丸読み
(句点で切つて、交互に読む)をしつたりしています。正しく読
むことと、内容を理解しイメージを膨らませて欲しいと思つ
ているからです。文字の間違いだけをいちいち指摘されては
かりだと、何が書かれているかイメージできないと思つたか
らです。私と二人が読んでいるのを、異学年の児童がじつと
聞いていることがあります。二人で読み終わつて、
「いいお話だね」

と言うと、読んだ子ども聞いていた子もニッコリして、
「うん」
と微笑みます。温かい空気の中で宿題が終わります。

音読カードにひと言を書くのも大変です。もつと丁寧にと
思ふ気持ちをグツと堪えて、私は判子を押しします。担任に「丁
寧に」と書かれていると、

「ほらね。先生も丁寧に書いて欲しいんだよ。読めるように
ゆつくり書こうね」

と励ますことができます。担任のひと言は、子どももおうち
の人も励まし進む道を指し示してくれます。学校は忙しいで
す。でも、たまにはひと言を書いて欲しいのです。褒めてあ

れば、うんとうれしい。子どもも、おうちの人も励まされます。

6時間の4年生から6年生が午後4時過ぎに帰つてきま
す。問題が難しくなるし、漢字の練習も多いです。九九もま
だ正しく唱えられないのにわり算のプリント。5年生は小数
のかけ算。何度もやり直します。でも、途中で投げ出す子
はいません。宿題はやっていくものだ、ラサール・ホームの
職員も子どもたちも共通認識をしているからです。

プリントを見て、漢字の練習を見て、音読を聞いて、音読カー
ドに判子を押しして学習支援が終わります。音読を聞いている
とき何人かの子どもが重なるので、ボランティアがもつとい
たらなあと思います。

「僕の誕生日は6月27日なんだよ」

と教えてくれたR君。私は壁に止めてあつたカレンダーに「R
君お誕生日7才おめでとう」とボールペンで書きました。後
日、目ざとく見つけた兄のT君も誕生日を教えてください。
9月のカレンダーにT君の誕生日もカレンダーに書きました。
家庭の事情で、今はラサールホームで生活している子どもた
ち。生まれてきたときはきつと祝福の笑顔の中にいたはずだ
と私は思います。その記念日の誕生日。私からも「おめでとう」
を伝えたのです。

子どもたちが宿題を終わらせて、

「ありがとうございました。さようなら」

と部屋に帰つて行く子ども達を、

「今日も頑張つたね」
と見送っています。

(泉区・元教師)

大川小訴訟高裁判決

どう読むか

命の教訓を生かすために

数見 隆生

大川小学校津波訴訟の仙台高裁判決は去る4月26日に出された。一年半前の一審地裁判決では、3・11当日の地震発生後の避難誘導に過失（結果回避義務違反）があったと認定したのに対して、今回の二審判決では、地震発生以前の校長ら学校管理職と石巻市教委に対して、学校保健安全法（第26、29条）に基づく安全確保義務（事前対策＝根源的義務）違反、具体的には危機管理マニュアル等の適切な改訂、整備を怠った「組織的過失」認定を行ったのである。

学校や教育行政は、災害の起きる事前の対策や備えこそ大事なのだという学校防災上の問題点を正面に据え、一審に比して踏み込んだ判決だったと言える。

それに対し、やはり想定外で予

見は不可能だったとか、判決は現場（学校や教員）に防災上の過度な要求をしているという意見もあり、再控訴した市や県の見解もその立場だと言える。

しかし判決理由をよく読むと、一般教員の「過失」責任の判示をしたわけではなく、校長ら管理職には「地域住民の平均的な知識・経験よりも高いレベルの防災知識の必要」は指摘しているものの、それは子どもを守り育てる「職務上知り得た地震や津波に関する知識や経験を、市教委や他校の教職員との間で相互に交換しつつ共有できる立場にある」ことを根拠にしたものである。

また教育行政は、そうした学校の防災力量を研修等を通して醸成する責務があるが、むしろ、ハザードマップでは大川小は津波浸水域でないことから避難場所に学校（体育館）を指定したことで「安心材料」意識をもたらし、防災マニュアルに架空の避難場所を書き、避難経路や方法を定めず、避難訓練もしていなかった。市教委はその問題指摘も確認もしていなかった。判決は、個々の教員の問題よりも

学校保健安全法第28条（学校環境の安全確保義務とその連携）に示すこうした学校と行政の「組織的過失」を問題にしたのである。

判決書面は167頁ある詳細なもので、学校防災の教訓を引き出す事前対策の問題点（根源的義務）や個々人の責任より「組織的過失」を問うたところに画期性があると言える。だが、それでも裁判という範疇の問題提起であり、二度とこういう悲劇を繰り返さないという立場からすると、私はもう少し広げた背景の問題を共有する必要があると考えている。

一つは、教職者の防災力量は一般住民並みであってはならず、そのためには、教職研修だけでなく、教員養成教育の充実が不可欠だし、「地震と津波の関係」「津波の脅威」を生徒に教えられるだけの教養がなくては、防災意識向上や住民説得・誘導などは不可能である。

二つは、ハザードマップを「安心材料」にしてしまった意識の問題がある。マップで浸水域になっ ていなかった半分以上の学校に津波が来たが、この見直しが十分されていないことがある。マップは

どういう原則で作成されたのか、どう活用すべきなのか、協力したはずの研究者の改善策もあまり聞こえてこない。作成元の防災行政機関↓教育行政↓学校というルートで下達されていただけである。だから受身の学校は「安心材料」にし、体育館を平気で津波のときの避難場所にし、住民が避難してきたときに、誰が住民対応するのか、誰が子どもを守るのかの話し合いもしていなかった。

三つは、学校の多忙化の問題と、その背後にある現代社会の学力主義的な教育状況の問題である。人間らしく生きていく学力（実や花）の育成は大事なのであるが、総体としての人間が育つにはその根幹（根っ子と幹）に命の保障としての安全・安心な環境、愛と連帯、からだと心の支援、ゆとりある学校空間（居場所）と時間・仲間の関係性が不可欠である。この判決の背景には、いま学校は子どもへの尊い命を中軸に位置づけられない貧弱化の様相があると私は読んだ。

（センター代表

今だから声にできること

阿部 美弥子

震災4ヶ月後にやっと見つけた物件で、自分で電化製品を買い付け、運搬・設置。店内のレイアウト・塗装をして、おぼつかない営業をするも早や5年が過ぎようとしている。

震災バブルと言われた影響もすこし受け、対お客さん一人だけの空間の時は生い立ちや本音が出やすい。本音を打ち明けられると、そのお客さんに対して私の中で信頼が生まれ親近感がわき、笑顔の深みが違ったりする……。私の勝手な想いだから相手とは温度差があるかもしれないが、それも楽しまないと……である。

○月○日 震災から変わった

10時半のラストオーダーの少し前に可愛い女の子2人が、そうつと中を伺いながら、「まだ大丈夫ですか」とカウンターの中央に座り、「こんなお店探してたんですよ。賑やかで自分の声が聞こえなかったりじゃなくて、周りが気にならなくて落ち着いて話せるお店を」。

若い2人がチョイスしたのは日本酒、若い女性が日本酒を好んで頂くことは将来的にとっても喜ばしいこと。何がいか決めかねていたので、「2人で利き酒3種たと6種のお酒を楽しめますよ」と勧め。

お通しを口にして「ん、おいしい」と声もれる。その一言でヒトが垣間みえる。

6種の日本酒を飲みながら、三十路を迎える心境を話している。女性にとつて40・50歳を迎えるより30歳を迎えるのは一番人生を考えたえさせられる時期でもあるのだ。彼女たちも今置かれた環境、立場

を考え、自分の人生を後悔のないものにしようと思案中なのだ。私と同郷ということから震災後の町の変わりように思うことは同じだった。

「昔の街並み・ふれ合った人々・幼い頃の遊び場・家族との思い出は記憶の中、変わりゆく町はうれしいことではあるけれど、心の中は寂しく、ついていけないのが本音」と言う。同感である。

歯をみせて終始笑顔の保育士さんは22歳の時に震災で両親を亡くしている。3人姉兄の未っ子。強い子だなという印象を持つ……。彼女から両親を亡くしたという言葉が放たれた瞬間、笑顔のまま表情の変化がなかった。一緒に来店した親友は、「震災1週間後に車で彼女の避難所、総合体育館に向かい、彼女の家があった方を眺めたら、瓦礫をよけて何かを探している彼女らしい姿を見つけたので叫んだら、こちらが励まさないといけないのに、満面の笑みで手を振る姿に涙が出てきて」と話す。相手に同情させないための気づかいなのだろう。

「両親の写真や着ていたもの、愛用していたものがないか探していた」と言う。

「私はライフライン、ガス・電気・水もない中で、『無い生活』を楽しんでやろう。ないからこそ工夫・アイデアが生まれると思ひ、瓦礫で火をおこし、お湯を沸かして洗濯・体の補整などしてましたよ」と話すと、

「避難所の生活は姉兄がいたから寂しくなく不便とも思わなかった。結婚して一年になるけど旦那さんと一人で無人島で誰も頼るひ

ともいなく、何もないうところから開拓して家造ったり、魚を獲ったり、お互いしか頼ることができなくて子どもができたら悩みながら誰の助言もない中で二人で考えて答えを出すような生活をしてみたい、転勤族で生活の環境が変わることの方がいい」と語り始めた。私は、(結婚して義父や義母や親戚との付き合いが負担なのかな) と思ったが、そうではなかった。

旦那さんの両親は優しく心配もしてくれる。実家には旦那さんの趣味のバイクを置かせてもらっているから彼女に何も言わずとも実家に寄って、おかずをもらって来たり、いつでも行ける。それは悪いことではないけれど、私にはいつでも行ける実家も、いつでも会いたい親がない……。そんな妻の心境をくんでくれる所が全くない価値観のズレは誰でもあるが、震災で両親を亡くしている妻の気持ちに気付いていない。実家が便利なのは分かるけど、甘えないで生きて行こうよ。私には甘えたい親がないことを察して……、この心境が無人島で生活したいにつながるようだ。

できた溝を埋めるには会話がいい、と話すと、言えば行く回数減らしてくれるけれど、またどこかで頼るのが分かるから、両親を亡くした気持ちを分かってくれと言うのは無理だけど、寄り添う心がほしい。この事があつて子どもが生まれても旦那さんが両親を頼るのが分かるから子どもをつくりたいと思わない。二人で育てたいのに、という思いと葛藤するのが分かる。

三十路を前に急いではないけれど、笑顔のある後悔のない、納得のいく自分の人生を見つめなおしている。

〇月〇日 この日が来ると自分を責める

「この日が来ると罪恶感で押しつぶされそうになり眠れない。無性に涙が出る……」とフェイスブックにあげていたAさん。いつも長女の水泳教室に合わせて奥さんに送られて来店してくださり、近況報告してくれる。このフェイスブック投稿の数日後に来店。開店五分前に「ちわー」と、仕込み中だから暖簾も着替えも未だ。カウスターの真ん中に座り、私の表情をみて仕事を楽しんでるか否かを探る。

「3・11は家から出ないんです」と話し始めた。

あの日、小学校5年の息子を迎えた途中、息子が「あつ 〇〇君」と声をかけ、「どこに行くの?」「お婆さんのところ」と短い会話。自分は高台にある姉の家に息子を預け、3歳の長女を保育所に迎えに行った、保育所は今の復興住宅が建つ地区だから守られた。不幸の知らせを聞いたのは3日後、その子のお婆さんが勤めていた介護施設は海岸から2キロ離れた国道沿いにあり、その日は非番なのに家から近いので、地震があつたので施設が心配で向かった。一度家に帰った少年も追いかけて施設へ向かった直後に津波で亡くなってしまう。誰もがこんな所まで津波は来ない、鉄筋コンクリート2階建てで、階段しかない通路から利用者30人を一人ずつ避難させるのに時間がかった。

お婆さんのご主人は、急な妻と孫の死を受けとめられず、朝から酒をあり、妻と孫の名前を近所に聞こえるくらい叫び、近所の方は気の毒がり、胸が締め付けられる思いで息子さんに知らせ、引き取りをお願いしたという。

Aさんは、「あの時に無理矢理にでも男の子を車に乗せ、避難させておけば良かった……」その後悔で、3・11が来るたびに自分を責める。

同時に私も、震災3年前に同級生をその介護施設に看護師として職を紹介していなければ、私の子の同級生になる息子さん二人から母を失わずに済んだのにと後悔し、罪恶感で押しつぶされそうになる。

その職場は私の前の職場であり、母のケアマネジャー含め同僚11人と利用者4人を失い、責任者は2日後に独自で重機を使い、全員のご遺体を一週間かけて見つけ出した。ケアマネジャーの旦那さんは妻を探し出すまではと手伝い、「ストップ! 服が見えた。〇〇子のだ。ここからは俺がやる」と。

間もなく陽が沈む夕刻に泣き崩れる声が響いた。私はしばらく立ち尽くしていたのを奮い立たせ、お世話になったケアマネジャーに手をあわせた。

(一杯呑みや・こまち店主)

徳水博志 「震災と向き合う子どもたち」

「復興教育」に関する待望の書が出た。徳水博志氏による雄勝小学校の実践は、いわゆる「復興教育」の旗頭として世に問われて久しいが、一連の実践が一冊にまとめられたことは「復興教育」の実相を一つの像として結びつける役割を果たしている。

自らも親族を亡くし、自宅を失う混乱の中で、氏の胸に去来したものは何か。この一点を探ることは、氏のこれまでの生き方や培ってきた信念を深く掘り返すことでもある。その典型が「森・川・海をつなぐ環境教育」（明治図書 2004年）であり、この時、すでに氏の中には子どもたちにとって必要な社会や世界に参加していく力（＝「社会参加の学力」）の淵源が構想されていたと思われ、混乱の中でその思いが再び露わになったのだと私は考える。つまり、震災後の氏の実践は、実は震災以前から始まっているのであり、それが震災を契機により鋭く、より輝きを放つことになったのだ。

震災後の実践は、まずは職員間の共同をどう創るかということから始まる。「指導主事訪問を復活させることが学校復興だ」という管理職に対して、違和感を覚えるのは当然であり、むしろこうした見当違い（見識のない）の学校運営の中で、「復興教育」のイメージを鋭敏にさせていったと思われる。「パンドラの箱」が開いたのである。

氏は、「南中ソーラン」の実践を皮切りに、雄勝湾のホタテ養殖と漁業の復興、雄勝硯の復興とまちづくりの実践に取り組む。震災前の実践と地域の人々とのつながりをベースに、静かに実践を展開する。

しかし、これはある意味、震災前の実践の延長であり、実践化への道のりと結果はある程度



「予定調和的」なものだと私には思われる。つまり、故郷の復興をつぶさに見つめさせ、その後継としての意思を育て、大人の踏ん張りを可視化することによる子どもの変容は、氏の中では「見えていた」実践だと思われる。

では氏のいう「復興教育」とは、いつ始まったのだろうか。それは明らかに「子どもの荒れ」が契機になっている。これまで経験したことのない種類の荒れ、「心が何かに囚われている」ような得体の知れない荒れは、氏を一瞬戸惑わせ、そのまま一学期を終える。

実は、この感覚は私も味わった。時期もほぼ同じである。何となく指導が入らない。両者（教師と子ども）の言葉がどこか上滑りし、語りかけてはいるがその言葉が行方不明になるのである。関係が壊れているわけではないのに、言葉が子どものからだを貫かない。

氏は、ここで自己省察に入る。そして、子どもも親も教師もすべてが1000年に一度の《未体験ゾーン》の中で傷を負っているということ、その中で《子ども理解の転換》が必要であることに気づく。《子ども観》を変えることが、教師にとっていかにしんどい作業かは、誰もがよく知るところである。指導の出発点が変わるのだ。登りかけた山を引き返すに等しい。

共同制作の木版画「希望の船」は、そんな転換の中で《ケア》と《教育》の結合の結果として生まれた作品である。物語を編みつつ癒し、慰撫しつつ奮い立たせる。決して逡巡がなかったとは言えないだろう。しかし、「これしかない」という強靱な信念こそが生んだ作品であろう。ぜひ現地に足を運び、この作品に接してほしい。

（村野俊弘・和光大学）

おすすめ
BOOK

「先生！」今日も笑顔でかわいい教え子たちがあいさつをしてくれました。いっぱい元気をくれてありがとう！

いつの間にか教員生活も30年近くが経ちました。いつも心にある温かい思い出がづらい時期も支えてくれたように思います。先生方、お元気でしょうか。

小学校4年生。それまで男の子たちにも負けないおてんばな私でしたが、肺の病を患い初めて長い期間学校を休みました。友達と馴染めなくなった私を「美人のT子先生」（と、いつも御自身のことをこう呼んでいらしたベテランの先生でした）は、「ゆきちゃん、友達ができやすいように○○ちゃんの席の近くにしてあげるよ。」と、優しく手をつ

ないでお話してくれました。心細い思いをしていた私にとつて何よりの励ましとなりました。一人ぼっちの子に寄り添う先生でありたいと思います。

小学校5、6年生。当時20代の若い男の先生が担任となりました。私たち女子はうれしいうらや、恥ずかしいやらで……。『ゴリラ』『短足』（先生「めんきさい」と、それはそれ

は様々な悪態をつけて楽しんでいました。それでも先生は休み時間に縄をして遊んでくれたり、ギターを弾いていろいろな歌を教えてくれたり、休日には（彼女とのデートもしないで）ハイキングに連れて行ってくれたりしました。だから、私は今も「夢に向かって笑顔でガンバ！」という先生の教えを子どもたちに伝えていきます。

わたしの出会った先生 22

出会った先生方に感謝

高橋 由紀子

中学校入学。「金八先生」のリアル

世代です。当時は校内暴力の嵐が吹き荒れ、授業が成立することはほとんどありませんでした。私は、たのきんトリオ（なつかしい！）に夢中になり、友達と親衛隊（サテンのはつぴに、そう！ペンライト！）に入り、「追っかけ」をするようになりました。休み時間にはいつもコール（歌の合間に叫ぶ）の練習。家に帰って

からも擦り切れるほどレコードを聴いて、コールの練習。最高に楽しかったところです。

3年生進級初日。あれほど神棚にお願ひしていたのに、私は通称「カマキリ」のクラスになってしまったけれど、私たちには大切な仕事があるので、お構いなし。ついにある暴挙に出ました。卒業試験のすっぱかし。その日はコンサートチケットの



販売日。○○芸能の前には女子中高

生の長蛇の列。次々にお姉さんたちが補導されていきます。私たちはやっとお目当てのチケットをゲットして意気揚々と学校へ。この後、どんなことが起こったかは、書けません（笑い）。一応、高校に受かり、書類を受け取りに行きました。「お前のは、ないなあ」と苦笑いの先生たち。あのカマキリ先生は、受験当日、保育所

に預けるお子さんを抱っこして、高校の校門まで応援に来てくれました（いろいろすみません、ありがとうございませう）。悪いことをする子に正面から向き合い、それでもどこかに許す・見守る心を持って対応していただいたことに感謝です。

高校と大学はとりあえず真面目に通いました。大学では、養護施設での学習ボラと障害を持った方々の施設でのボラなどに携わりました。当時のゼミのH先生にはいつも社会的弱者の立場に立つて考えることの必要性を教わりました。いつの時代でも先生方や仲間たちに恵まれていたと今あらためて思います。書ききれなくて残念ですが、教員になつてからも多くのすてきな先生方と出会いました。感謝の気持ちでいっぱいです。

つい先日、息子の部活の先生から母の日のプレゼントをもらいました。感激でした。保護者への温かいお心遣い、それはまぎれもなく、子どもたち一人ひとりへの想いなのだ、また一つ教えていただきました。

（野村小）

話し合いをしよう

佐々木 大介

1 話し合いは、 いつでもどこでもできる

「先生、席替えしたんだから、後ろのロッカーも変えた方がいいです」

「えっ、どうしてですか？」

「だって、窓側の人が廊下側のロッカーにランドセル取りに行つて、廊下側の人が窓側に行つたらぶつかるでしょ！」

「まあぶつかりはしないけど、動線を考えてくださいね」

「どうせん?」

「歩くコースのことです。みんなはどう思う?」

「いいんじゃないね。なんか気分も変わるし」

「確かに取りに行くときぶつからないから、時間の短縮にもなる。」

「なるなる! かなりはやくなるよね」
(えっと、全寮時間の短縮にはつながってません……)

席替えをしたからロッカーを変えるというのは初めてのことだった。でも、言われてみると、なるほどと納得できる。それからは、席替えのたびにロッカー替えと廊下のフック替えもしている。

こんなことを子どもが提案できるのも、クラスの話は先生が全部決めて従うのではないということ子どもが経験し、自分たちで考えようとするところが当たり前だと思っているから。ささいなことにも目を向けることがで

きるからだ。では、学級の一番最初の話し合いは何かというと、靴箱をどうするかだ。

「先生、どうしてうちのクラスは靴箱に名前シールが貼ってないんですか?」

「それはみんなで考えて決めるからです。靴箱の場所は、どうしますか?」

みんな決められていることが当たり前になつていたので不思議がる。

「背の高い人は、上の段がいいと思う。その方が置きやすいから」

「6年生なんだから、一番上に届かない人なんていないよ。それに、小さい人は一番下の段になつちゃうよ」

「背が高いからって、上の方が便利がいいとは限らないし、低いところの方がいい人だつていると思う。背が低い人だつて高い方の靴箱を使いたいかもしれないし」

「なるほどね。確かにそうかもしれない。じゃ、どうするの?」

「みんなで下駄箱に行つて、入れたいところに入れてみればいい!」

靴箱の場所にこだわりのある子は、あまりいない。どこでもいいと思う子は、最後に空いているところに入れるのでスムーズに決まる。ほんのささいなことだけど、いつでもどこでも話し合つて決めることを教えるには絶好の機会である。自分の場所を忘れるのではないかと心配したが、そんな子はいなかった。

2 みんなで決めて、 みんなを守る

修学旅行の日程でいつも形式ばかりだと感じていたのが、就寝時刻だった。その時刻通りに寝ていた部屋は今まで見たことがない。では、どうしようか?

これはみんなで決めてみんなを守ることを教えるチャンスである。

修学旅行の実行委員が、放課後教室に集まつた。

「実行委員会が決めたことを学年全員に提案して、それでオッケーだったらいいんですか? あとから先生がやっぱりだめだつて言うんじゃないですか?」

「みんなが決めたことを尊重します。でも、決まっていることもあります。岩手方面に行くことや宿泊するホテル、バス会社も決まっています。これを変えてくれつていわれても、それはできません。分かりますか?」

「部屋も自分たちで決めていいんですか?」

「もちろんです。でも実行委員会で決めるのは、ねらいとそのやり方の提案です。みんながメンバーを決めるわけではありません」

「寝る時間もかも決めて提案していいんですか?」

「もちろんです」

「バスの席もいいんですか?」
「それはきつと毎年クラスごとに決め

てますよ」

「お小遣いとかも自分たちで決めていいんですか？」

「もちろんです。しつこいですね」

「あとからやっぱりだめだつて言われそうだから確認してます」

毎日のように実行委員会を開く。自分たちに大きく関わる「就寝時刻」や「お小遣い」などの議題は白熱して実行委員会でもなかなか合意できない。

最初は、「いくらでも持つてきていい」とか「何時まででも起きてもいい」という意見も出てくる。そこが話し合いのスタートになる。

「みんながみんなお小遣いがたっぷりあるわけじゃない」

「修学旅行でおみやげを買うなら、帰ってから同じ金額を使った方がいい！」

考えはいろいろだ。大事なことは、いろいろな考えの子や立場があることにそれぞれが思いを寄せることである。

寝る時刻も、翌日の活動を楽しむために11時には消灯し、12時には寝ようという提案になった。

疲れて早く寝た子もいた。がんばって起きていた子もいた。12時過ぎもいた。でも、きまりを守ろうとした子がたくさんいたことが収穫である。

3トラブルをクラス全員で読み解く

思いこみが激しく、都合が悪いことにはうそをつき、悔しい気持ちを我慢

することができない。自分がされてい

やなことでも友達にはする。反省はす

まう。友達の気持ちを感じ取ったり、

自分の気持ちを相手に伝えたりするこ

とが難しい。パニックになると泣き叫

んだり、ものを投げつけたり、衝動的

である。「めんどくせー」「うざっー」

というチクチクした言葉や机を離す気

配を感じる教室。龍と圭のとつくみあ

いのけんかが起きた。話を聞くが、な

ぜここまで激しくなるかの原因が分か

らない。教室では、何事もなかったか

のように作業を続ける子の多さや「ま

たか」という子どもたちの表情から、

この2人のけんかはよくある空気を感

じた。当事者だけの問題でなく、クラ

ス全体で考え、共有する必要性を感じ

つか！という見方から、「あおる奴が

悪い！」という見方に変わっていく。

教室の中で気になることは、「自分は

関係ない！」という雰囲気やそう思う

子どもが増えてることだ。面倒くさ

いことには首をつっこまないように家

庭で言われている子も多い。でも身の

回りで起きていることに無関心でいる

ことがその子の成長につながるのだろ

うか。学級集団は人間関係や社会性を

学ぶ絶好の場所である。勉強と同じよ

うに学校で身に付ける大切なことでも

ある。一緒に生活していれば必ずトラ

ブルも起きる。でもそれは悪いことば

かりではない。そのトラブルをどう学

級集団の学びに変えていくのが大事

なことだ。当事者だけでなく、みんな

Challenge 挑戦の一年に 修学旅行通信 12号 5/23

協力しよう絆を深めよう

第3回実行委員会を22日の放課後に開きました。前回に引き続き、1時間近く話し合いました。内容も建前だけではなく、昨年の野活のことなどを思い出しながら、本音で話し合うことができました。4つの内容を報告します。

実行委員会からの提案

1 テレビを見ることにしてよいか

見てもよいが、みんなの迷惑にならないようにする。
特に9:00以降は静かな音で。寝たい人は起こさないようにする。
11:00には、消して布団に入る。
次の日の活動のことを考え、12:00までには寝るようにする。



2 おかしや食べ物などを持っていったり食べたりしてよいか

おかしは、もっていかない。
しかし、盛岡での自主研修の時には、試食や体験場所、岩手の特産物(名産)などは、買って食べてもよいことにする。ただし、食べ歩きなどのマナーには気をつける。コンビニやスーパーは利用しない。しかし、名産品は認める。

3 部屋で遊ぶものは何を持ってきてよいか

トランプとウノだけは部屋で持ってくる人を決めて、持ってきてよい。
ただし、みんなで遊ぶためのものなので、部屋に一人だけとする。

4 しおりには、どんなことをのせるとよいか

ホテルやバスの中でのルール・マナーをのせる
研修やホテルのメンバーを書く
ビンゴなどのゲームをのせておく。
自主研修のまとめや感想を書くスペース



5 そのほかに考えていきたいこと

サービスエリア(高速道路)では、トイレと水飲みだけ。おみやげは買わない。
夕食の時に、自主研修の報告会をする。それはリーダーでなくてもよい。

「あおる奴が悪い！」という見方に変わっていく。教室の中で気になることは、「自分は関係ない！」という雰囲気やそう思う子どもが増えてることだ。面倒くさいことには首をつっこまないように家庭で言われている子も多い。でも身の回りで起きていることに無関心でいることがその子の成長につながるのだろうか。学級集団は人間関係や社会性を学ぶ絶好の場所である。勉強と同じように学校で身に付ける大切なことでもある。一緒に生活していれば必ずトラブルも起きる。でもそれは悪いことばかりではない。そのトラブルをどう学級集団の学びに変えていくのが大事なことだ。当事者だけでなく、みんなを考えることによって、それはクラス

(長町小)

求められるもの～

みやぎ教育相談センター所長

寺 沢 幹 緒

相談センターと研究センターの相互交流が始まって3年がたちました。これまでは相談員が主に事例報告を中心に執筆してきましたが、今回は、相談員の「目」変革」という問題について、2つの事例を紹介しながら考えてみたいと思います。

相談センターには、相談員になるときに確認する「電話相談の心得」（以下、「心得」という文書があります。これは相談センター35年の歴史を通じて整備されてきたもので、先輩の相談員の知恵と工夫がたくさん詰まっています。全文を紹介したいのですがその余裕はないので、その中の一部を紹介します。

相談員としての

子ども観・相談観について

- (1) 子どもの成長の可能性を信じる。
- (2) 人間として対等の関係を実感し、響き合いを待つ。
- (3) 考え方、感じ方をありのままに受け止め、共感的に理解する。
- (4) 教える（助言する）ことに性急にならず、ともに考え、ともに学ぶ構えを大切に。
- (5) 論理的だけでなく、情緒的側面への関わりを大切に。
- (6) 先入観や固定観念でみないで、新鮮な目で柔軟に対応する。
- (7) ともに考え、ともに歩もうとする、解決の方向性を自らつかむようにする。
- (8) 自尊心を大切にし、追い立てないで待

つこと。

ごく当たり前のことが書かれていると感じられるかもしれませんが、これを実践するのはなかなか難しいのです。

最初は、数年前に私が経験した事例です。

A君は中学3年生の秋ごろから学校に行けなくなりました。お母さんが心配して本人と一緒にセンターに相談に来ました。私が担当することになり、数学を教え始めてしばらくしたときです。突然、大声で泣き始めました。授業は中断せざるを得ません。授業中に取り組んでいた問題がうまく解決できずにいて、私も何度も説明を繰り返しましたが、なかなか理解できません。そのうちに泣き出してしまったのです。最初は問題が解けなくて泣き出したのだと思いましたが、あとでお母さんから聞いた話によるとそうではなく、「自分の進路選択についていろいろ言われたのが悔しかった」ということでした。実は、A君は県外のスポーツ強豪校に進学したいという希望を持っていました。県内にも強豪校があります。私は「なぜ県内ではなく県外なのか」という疑問を持ったので、そう思った理由を聞き出そうとしました。私としては、その理由を聞いたうえでA君の希望を応援するつもりでした。しかし、そうした私の態度が、A君にとっては、「ダメ」と言われたのと等しいものと感じ

られたのです。「いろいろ言われたのが悔しかった」とお母さんに言ったそうです。私は大いに反省しましたが、逆にA君はそれがきっかけで登校するようになり、県外の希望の高校に進学でき、レギュラーにはなれなかったものの、寮に入って充実した3年間を過ごしました。友達もたくさんできました。卒業時に大学への推薦入学を先生から勧められましたが、それを断って、今は、公務員を目指して頑張っています。

経過を振り返れば、私の質問がきっかけで不登校から脱したことになりましたが、その逆の状態になることも十分にあり得ます。普段の家庭生活の様子やお母さんの思いを聞いていると、本人を温かく見守っている家庭の様子が伝わってきます。そのことがA君が登校するようになった根本的な要因であって、私の不用意な一言が功を奏したのではないのです。

「子ども観・相談観」に照らしてみても私のとった態度のどこに問題があったのでしょうか。(1)～(8)のどれにも反しているように感じられますが、とりわけ「(3)考え方・感じ方」をありのままに受け止める」という点で問題があったのだと思います。最初に、「良い考え方だね。希望が実現するように応援しているよ」と言ってから、「その高校を選んだ理由を話してもらえないかな」と質問すれば、A君を悔しがらせることはなかったかもしれませんが、私はそうしませんでした。いきなり、「なぜ

自己変革 ～教育相談員に

その進路選択なのか」を問い詰めるような話し方になってしまったのです。もちろん、「ありのままに受け止める」ということは相談員になったときに先輩相談員から厳しく言われましたし、自分でもよくわかっているつもりでした。しかし、人というものは皆、自分の「本音」というものを持っており、いくら話し方のノウハウを学んでも、そうした本音の部分はいつの間にか言葉や態度に表れてしまうものなのです。私の心のどこかに「何も県外にまで行かなくても」という思いがあったことは否めません。「心の底から」受け止めるのであれば、「心得」の文章は単なるお題目に墮してしまいます。そうした意味で、この「心得」は相談に携わる人自身に「自己変革」を迫るものでもあるのです。

次は最近の事例です。

Bさんは、50代の男性で、最終学歴は大卒。教職経験もありますが、現在は仕事に就いておらず、「自分は引きこもりだと言っています。『自分の人生には何もなかった』と感じていて、『高校生からやり直して、大学で学び、一流の学者になって、会社や大学から『是非来てください』と言われるような人間になりたい』という希望を持っています。相談センターにもその希望をぶつけてきました。こうした希望を聞いて「本当にそうだね。頑張っ

だけいるでしょうか。『大学まで出ている人がそんなことをしてどうなる。それより今までの経験を生かして別な道を考えたらどうか』と考えるといます。私もそうでした。それに50代というBさんの年齢を考えると希望が実現するのは至難の業としか思えませんでした。私のそうした姿勢が彼の怒りに火をつけてしまいました。Bさんによれば「自分が高校からやり直したいというのは『絶対』だ。『絶対』ということが本当に分かっている人なら『じゃあやれ！』と後押しするはずだ。それを言わないで別な選択肢を提示するのは分かっていないからだ』というのです。いくら言葉で「あなたの気持ちはわかる」と言ってみたとところで、それが言葉だけのものであることは態度に表れているのではないか、という批判です。

「人生をやり直したい」と思っている人は沢山いますが、たいていの場合は、「できるならば」とか「もっと若ければ」などという前提条件付きの希望であって、実現できると思っている人はほとんどいないはず。それはある意味「今までの人生にもいいことはあった」という思いがあるからではないかと思えます。でも、Bさんのように「自分の人生には何も無い」と感じていたらどうでしょうか。「別の道を考えてらどうか」というアドバイスが心に響くはずはないのです。

Bさんとほとんどケンカ腰のやり取り

をしながら、私は相談センターの前身の総合教育相談センター発足直後に作られた「登校拒否の相談の取りくみの中で得た『確かなこと』』という文書を思い出ししていました。その中の「教育相談員に求められるもの」という項目の中に「相談者は傷つき、ようやくたどりついたのだから、悩みの全てを許容する姿勢が求められる」という一節があります。よく「共感的に理解する」とか「心に寄り添う」という言い方をしますが、「悩みのすべてを許容する」ことで初めてできることなのかもしれない。自己変革ほど難しいものはない。なかなか自分にはできないことがありますが、少しでも近づけたらと思いつながら日々の相談にあたっています。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

（土曜：10時から15時）

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。



おすすめ映画

トンマツコルへようこそ

戦争をしないで平和に暮らす方法

韓国だからこそ作られた戦争映画

2005年の韓国映画。音楽は久石譲。上映時間は132分。

舞台は、朝鮮戦争中の山奥の村トンマツコル。村人たちは当時の内戦の勃発も全く知らず、平和に暮らしています。この村に予期せぬ3組のお客さんがやってきます。

墜落した連合軍戦闘機の米軍パイロットは村人に救助されます。次に韓国軍の脱走兵2名が迷い込み、さらに北の人民軍兵士3名が入り込んで来るのです。

架空の村のおとぎ話のような映画のはじまりです。

武器をつきつけ合う北と南の兵士たち。殺し合いにはなりません、手榴弾で食糧倉庫が大爆破。貯蔵のトウモロコシがはじけ、村中にポップコーンの雪が美しく降り注ぎます。1年分の食糧を失った村人を思い、兵士たちは、畑仕事の手伝いを申し出ます。6人の兵士たち一人一人の人物像がよく描かれ、少しずつ心が通い始め仲良くなっていく「奇跡」が起きるのです。ジャガイモ畑での収穫作業、巨大イノシシの退治作戦、緑の大草原でのそり遊び、祭りでは共に歌をうたい踊り、夜空に紙風船を上げます。人望の厚い村長のもと、自給自足の生活は、幸せと笑いに満ちあふれた日々です。そんな村での生活でも、リーダーたる2人の兵士は戦場での残酷な記憶を抱えています。映画の終盤、村が無差別空爆の標的になります。この時、6人の兵士は標的の村を外すために「陽動作戦」に立ち上がります。

韓国で作られた戦争映画は、悲劇的な結末、戦争の暴力性を強調する作品が多かったといえます。それに対してこの作品は戦争をしないでいかに平和に暮らすか、その方法を紹介しています。監督は日本での舞台挨拶でそう述べています。

朝鮮戦争は決して1953年に終わった過去の戦争ではないのです。



(長住 康博)

センターの動き

4月

3日 つうしん執筆者への礼状と読者への添え状を作成・印刷

6日 午後、事務局会議 つうしん90号と別冊18号の発送作業、新・旧事務局メンバーの顔合わせ、新メンバーとして佐藤正夫さん、高橋三代さんを迎える

8日 仙台文芸館へ平田オリザと小森陽一の対談を聞きに参加。平田さんに高校生公開授業の講師の件を打診

9日 臨床教育学会の震災調査のまとめについて打ち合わせ

11日 午前、市民の会事務局会議 午後、仙台市教育委員会会議を傍聴。七来田小の千葉先生と学習会「なやんでるたーる」の打ち合わせ

13日 事務局会議、つうしん読者から紙面づくりについての声が寄せられる

14日 教科書問題を考える会、中学道徳教科書への意見交換

16日 千葉保夫さん来室、夏の東北民教研集会で特別分科会(三島宇慈雄を語る)の持ち方について打ち合わせ

18日 つうしん91号企画について打ち合わせ。午後、正夫さんと3人で教科「道徳」の学習会「なやんでるたーる」のこれから取り組みについて意見交換

23日 午後、ゼミナールSeminar、フレールベルの幼児教育論2回目

25日 午後、仙台市議会のいじめ問題等対策調査特別委員会を傍聴。中森先生のブックレット「愛憎録」の件で北村さんと打ち合わせ

27日 午後、事務局会議
28日 教育を読む会、参加者6名。午後は、民主教育を進める宮城の会総会と山岸さんの講演会。林由貴先生と算数講座の打ち合わせ

5月

2日 午後、市民の会の仙台市教育長との懇談に出席

8日 市民の会事務局会議、運営委員会案内作成・送付

9日 仙台市学校適正規模推進室と仙台市の学校統廃合について懇談

10日 仙台市の就学支援拡充を求める要請書を市に提出

11日 午後、事務局会議

14日 千葉保夫さんと東北民教研の特別分科会の件で打ち合わせ。ホームページの日記コーナー1日のアクセス数152件。過去最高

20日 仙台の子どもと教育をともにも考える市民の会主催、想田和弘監督の講演会

21日 午後はゼミナールSeminar、フレールベル3回目。来仙中の里見先生も参加

22日 午後、仙台の総合教育会議を傍聴。ブックレット憂憤録校正

23日 午後、定例教育委員会の傍聴

25日 第2回宮城県教科用図書選定審議会の傍聴。熊谷さん来室。ブックレットの校正打ち合わせ

26日 「教育」を読む会、小学校の運動会、部活(中総体前)などで参加者は4名

27日 「道徳と教育」学習会、いじめについての最終回となる

29日 こここ講座打ち合わせ。今年度の持ち方、内容について協議。午後、数見代表と運営委員会に向けての打ち合わせ

6月

1日 東北学院大学で教育法学会が行われる(2日まで)教科書問題を考える県民のつどい

3日 午前、市民の会事務局会議、夕方6時半から第1回道徳なやんでるたーる。平日の夜にもかわらず現場から8名参加

7日 シネマ東北の鳥居さん来室。午後、みやぎ教育のつどい事務局会議

8日 午後1時から事務局会議、引き続き3時より第1回運営委員会

9日 午前、みやぎ教育のつどい実行委員会。午後、算数授業づくり講演会。15名の参加で盛り上がる。

11日 午後、つうしん原稿をお願いした東北福祉大の田代さん来室。大学のこと、子ども祭りのことなどについて話を聴く

12日 教育会館理事會へ出席。センターの活動報告

13日 第2回道徳なやんでるたーる。今回も満席

18日 午後、ゼミナールSeminar、フレールベルの教育思想4回目

19日 午前、こここ講座打ち合わせ。夕方、中森先生のブックレット「愛憎録」の頃の私物が納品される

20日 第3回道徳なやんでるたーる

22日 午後、事務局会議、つうしん次号特集について意見交換

29日 つうしん最終校正 (番井)